成長期における海外留学体験について、言語脳科学の専門家にうかがいました。

脳の発達期における海外留学の意義

東京大学教授　酒井　邦嘉（言語脳科学）

1964年生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。1996年マサチューセッツ工科大学客員研究員を経て、2012年より東京大学大学院教授。言語という究極の難問に脳科学の視点から挑んでいる。著書に『言語の脳科学』『科学者という仕事』（ともに中公新書）、『脳の言語地図』（明治書院）、『芸術を創る脳』（東京大学出版会）など。2019年4月には、新刊書籍『チョムスキーと言語脳科学』（集英社インターナショナル）が発行された。

海外留学の体験が生涯の財産となることに異論はないであろうが、成長期にある十代での海外留学、特に小中学生の単身ホームステイや高校生の長期留学が、日本での教育を上回るほどの意義や効果があるかどうかが問題となろう。海外留学では、留学後に自分の殻を脱して積極的に周りとかかわれるようになった、という他では得がたい体験を多く耳にする。ここでは、さらに脳科学と第二言語習得の観点から検討してみたい。

十代は、知識形成や人格形成の上で極めて重要な時期であるばかりでなく、脳の急速な発達期でもある。その過程では、外界に適応するように大脳や小脳の神経回路が形成される。この十代の高い適応力に比べれば、成人した後の能力はおおむね限定的であり、個人差が大きくなると考えられている。

また、英語習得に関する調査や実験によれば、第二言語の平均的な成績は、その言語に触れ始めた年齢が十代の前半である場合から、十代の後半以降である場合にかけて、減少傾向にあることが知られている。純粋に語学留学という観点からすれば、十代前半に英語などに触れることによって、より大きな定着効果が期待できると言えよう。ただし上記の体験のように、留学の効用は語学だけに限定されるものではない。

国際的な教育機関であるEducation First社（EF）が実施した2018年のアンケート（対象は学生と社会人を含む）によれば、留学前に「語学力の向上」をイメージしている人が最も多く、六割程度であった（複数項目より一つのみ選択）。ところが留学後に実感した経験では、語学力の向上を挙げた人が二割以下と大きく減り、逆に「未知の世界・異文化への理解、好奇心」と「グローバルな交友関係・人間関係」という項目を挙げた人が、それぞれ三割を超えた。これは、海外留学の体験が各人の志向を大きく広げうることを示しており、興味深い。

誤解がないように補足すると、十代の前半から始めないと英語が身に付かないというわけではないし、語学に海外留学が必須ということでもない。正しく言えば、いかなる第二言語の習得に対しても海外留学は有効なのだ。また、一つの言語がうまくなると、別の言語も同時に連動して上達することが起こりうる。これらの原因は言語が本来もつ普遍性にあり、言語機能が人間の脳の生得的な性質に由来するためである。この点については、最近の著書『チョムスキーと言語脳科学』（集英社インターナショナル）で詳しく解説したので、参照していただきたい。

日本人大学生の場合、半年未満の短期留学は増加傾向にあるが、長期留学にあまり変化はない（日本学生支援機構の調査結果による）。もし、十代の長期留学によって世界に対する目が開かれるなら、文部科学省が目標として掲げる「グローバル人材の育成」、すなわち「語学力のみならず、相互理解や価値創造力、社会貢献意識など」に資することは確かであろう。